

曖昧さへの態度がメンタライジングに及ぼす影響

才木 透羽・石田 弓

The Effects of Attitudes toward Ambiguity on Mentalizing

Towa Saiki and Yumi Ishida

It has been suggested that the mentalizing stance, which is an exploratory attitude accompanied by curiosity about one's own and others' mental states, requires a high level of tolerance of ambiguity, that is, the ability to withstand ambiguity. However, there are no studies that have examined the relationship between these aspects. In addition, previous studies have shown that it is desirable to examine not only the level of tolerance of ambiguity but also multidimensional attitudes, since there are multiple aspects in the evaluation of ambiguity. Further, the mentalizing stance is merely one aspect of mentalizing, and it is possible that there are differences in how other aspects are affected by attitudes toward ambiguity. Therefore, in this study, we examined how not only the mentalizing stance but also mentalization and the accuracy of the mentalizing of others are influenced by attitudes toward ambiguity. The results indicated that the mentalizing stance requires an attitude of proactive involvement toward ambiguity rather than a high degree of tolerance of ambiguity. It was also suggested that mentalization necessitates an attitude that allows for intelligent interpretations of ambiguity. Furthermore, it was shown that an attitude of dealing with ambiguity without sufficiently addressing it decreases the accuracy of the mentalizing of others. Therefore, it is suggested that mentalizing requires an attitude of active engagement with and interpretation of ambiguity rather than the ability to tolerate ambiguity.

キーワード : attitude toward ambiguity, mentalizing, theory of mind, tolerance of ambiguity

問 題

メンタライジングとメンタライジング的姿勢

厚生労働省 (2020) によると、企業が最も労働者に求めるスキルは、チームワーク、協調性、周囲との協働力であることが示され、現代社会ではより良い人間関係を築くことが重要視されている。このより良い人間関係を築く上で欠かせない能力の一つとして、メンタライジングがあげられる。

メンタライジングとは、自他の行動を内的な精神状態と結びついているものとして、想像力を働かせて捉えること、あるいは解釈することを指す (Allen et al., 2008 上地他訳 2014)。つまりメンタライジングができることで自分の感情に気づき理解しつつ、他者の感情を他者の視点から理解することができるため、健康な人間関係にとって重要な能力であることが示されている (Allen et al., 2008 上地他訳 2014)。

メンタライジングは精神分析の中に起源があり、心の理論の研究に影響を受けて、境界性パーソナリティ障害や愛着研究の中で発展してきた (上地, 2015)。Fonagy & Target (1997) は、メンタライジングを発達させるためには、養育者からの適切な理解や応答が必要であることを示した。つまり、子供に生じる身体的な緊張や興奮を特定の精神状態として意味づけを行ってくれる養育者の応答のおかげで、子供は自分の精神状態を認識できるようになることが示された (上地, 2015)。このように子供のメンタライジングを発達させるためにも、養育者は子供の情動に揺り動かされつつ、情動の揺れを許容し、柔軟な内省を行うことが必要であると示され、「メンタライジング的姿勢」を持つことが特に求められている (今里他, 2017)。

メンタライジング的姿勢とは、自他の精神状態に対する探求心と好奇心を伴う探索的態度のことを指す (Allen et al., 2008 上地他訳 2015)。精神状態は自明なものではなく不明瞭であることから、メンタライジングではある一つの見方を絶対視し探索を終了するのではなく、精神状態について多様で柔軟な見方をすることが求められる。そのため、メンタライジング的姿勢を持つことがメンタライジングにおいて必要であると考えられている。また、メンタライジング的姿勢には「曖昧さ耐性」の高さが必要になることが示唆されている (Allen et al., 2008 上地他訳 2015)。

曖昧さと曖昧さ耐性

曖昧さとは、十分な手がかりがなく適切な構造化や分類化ができない状態のことを指し (Budner, 1962)、曖昧さに対する反応の個人差を曖昧さ耐性と呼ぶ (今川, 1981)。この反応には様々なものが考えられるが、主に曖昧な状況に耐えられるか耐えられないかという反応に焦点を当て研究が行われている。例えば、曖昧さ耐性が低い場合、偏見やステレオタイプに結びつきやすいことが示されている (友野・橋本, 2005)。また、曖昧さに対して開かれた態度をもつことは、他者との関わりにおいて相手の心理状態を考え、共感的配慮を行う傾向があることも示されている (西村, 2013)。つまり曖昧である精神状態を想像し探索しようとするためには、曖昧なものを許容する態度が求められると考えられる。しかし、メンタライジング的姿勢と曖昧さ耐性の関係は示唆にとどまり、実際に数量的に検討した研究は今のところ存在しない。加えて西村 (2007) は、従来指摘されてきた曖昧さ耐性との関連要因も、単に耐性の高低という1次元だけではなく、曖昧さに対してどのような態度をもつことが関連するのかを検討することで、より明確な結果を得ることができると述べている。

そこで本研究では、耐性の高低ではなく、曖昧さへのどのような態度がメンタライジング的姿勢に必要とされ、影響を及ぼしているのかを検討する。西村 (2007) が作成した曖昧さへの態度尺度では5つの下位因子が存在し、その下位因子は曖昧さへの肯定的態度と否定的態度の2つに分類される。肯定的態度とは、曖昧さに対して寛容であり曖昧さを魅力的に感じる態度を指す。対して否

定的態度とは、曖昧さに対して非寛容であり否定的に評価し、曖昧さ自体を認めない態度を指す。つまり、曖昧さを良いもの、面白いものとして評価する場合は肯定的態度を指し、曖昧さを良いものとみなさず、できれば曖昧さをなくしたいと評価する場合は否定的態度を指す。曖昧さ耐性の高さは、曖昧な状況を好ましいものとして知覚する傾向を持つ (Bunder, 1962) と示されているため、曖昧さへの肯定的態度に含まれると考えられる。

また、メンタライジング的姿勢はメンタライジング能力の一側面であり、あくまで探求的な姿勢を指している。そこで、メンタライジング能力と曖昧さへの態度との関係も検討する。これによって、メンタライジング的姿勢にのみ曖昧さへの肯定的態度が必要であるのか、他の側面も含めたメンタライジング能力にも曖昧さへの肯定的態度が必要であるのかを確かめることができると考えられる。本研究では、メンタライジング的姿勢を含め、「他者に対するメンタライジング」と「自己に対するメンタライジング」の3因子からなる日本語版メンタライゼーション尺度 (松葉他, 2022) をメンタライジング能力の指標とする。

メンタライジングの正確さ

また Allen et al. (2008 上地他訳 2015) は、想像を現実根付かせて精神状態を解釈するためには、他者の解釈や考えを聞いてみる必要があると示している。このように精神状態を現実通りに理解することを「メンタライジングの正確さ」と呼び、巧みなメンタライジングを証明する指標の一つであると示されている (Allen et al., 2008 上地他訳 2015)。吉川 (1980) は、曖昧さ耐性が高い、もしくは高すぎると、曖昧さを減少させようという動機や行動が欠如している場合があると述べている。現実通りに精神状態を解釈するためには、曖昧さを減らしたいと思い行動することが必要であるため、曖昧さ耐性が高すぎではいけないと考えられる。そこで本研究では、メンタライジングの正確さが曖昧さへの態度からどのような影響を受けているのかも検討する。

しかし、日本語版メンタライゼーション尺度ではメンタライジング能力を測ることはできるが、メンタライジング能力の中でも正確さの側面だけ取り出して把握することはできない。そこで本研究では、メンタライジングの正確さを測定するために野村他 (2006) が開発した「アジア版まなざしから心を読むテスト (Reading the Mind in the Eyes Test : 以下 RMET)¹」を用いる。アジア版 RMET とは、人物の目とその周辺を表した画像からその人の感情を選択させるテストであり、回答の正誤で評価を行う。Baron-Cohen et al. (1997) は、複雑な心理状態を推測するうえで表情などの非言語情報を手掛かりとする際には、目を手掛かりとすることが特に有効であることを示している。また、心の理論を測定するテストとして用いられており、他者の感情を正しく推測できているのかを測定するという点ではメンタライジングの正確さに類似しているため、他者に対するメンタライジングの正確さの指標として用いることができると思われる。

加えて、日本語版メンタライゼーション尺度の中には「他者に対するメンタライジング」という下位尺度があり、他者に対するメンタライジング能力を測定することができるため、「他者」という

¹ アジア版 RMET は、瓜生山学園京都芸術大学吉川左紀子教授よりご提供いただきました。心より御礼申し上げます。

同じ対象であっても、メンタライジング能力とメンタライジング能力の一側面の正確さだけでは影響を受ける曖昧さへの態度は異なるのかについても検討する。

本研究の目的

本研究では、曖昧さへの態度がメンタライジングにどのような影響を与えているのかを検討する。メンタライジング能力だけではなく、メンタライジング的姿勢、他者に対するメンタライジングの正確さ、他者に対するメンタライジング能力の3つそれぞれと曖昧さへの態度との関係も検討する。また探索的に、曖昧さへの態度の下位因子間の交互作用によってメンタライジングに及ぼす影響が異なっているかについての検討も行う。これらが明確になることで、メンタライジングに必要な曖昧さへの態度が明確になり、特に対人関係で生じる曖昧な状況に接した時の態度から、メンタライジング能力の予測、測定につながる可能性があると考えられる。

本研究の仮説は以下の4つである。1つ目は、メンタライジング的姿勢には曖昧さ耐性の高さが必要であると示唆されているため (Allen et al., 2008 上地他訳 2015), 曖昧さへの肯定的態度である「享受」や「受容」がメンタライジング的姿勢に正の影響を及ぼすと考えられる。

2つ目は、曖昧さに対して開かれた態度を持つことは、他者の心理状態を考え、共感的配慮を行う傾向があると示されている (西村, 2013)。つまり、曖昧さへの肯定的態度があれば、心理状態の解釈を多く行うと考えられることから、曖昧さへの態度の中でも肯定的態度である「享受」や「受容」がメンタライジング能力に正の影響を及ぼすと考えられる。

3つ目は、他者の精神状態を正確に解釈するためには他者の考えや解釈を聞いてみる必要があること (Allen et al., 2008 上地他訳 2015) や、曖昧さ耐性が高いと曖昧さを減少させようとする動機や行動が欠如している場合があること (吉川, 1980) から、メンタライジングの正確さには曖昧さを減少させるような動きも必要になると考えられる。そのため曖昧さへの否定的態度であり、特に曖昧さに対して知的に把握、対処しようとする傾向である「統制」が他者に対するメンタライジングの正確さに正の影響を及ぼすと考えられる。

4つ目は他者に対するメンタライジング能力と他者に対するメンタライジングの正確さは、どちらも同じ「他者に対する」メンタライジングという側面を測定しているため正の相関があると考えられる。しかし、メンタライジング能力には「享受」や「受容」が正の影響を及ぼすため、他者に対するメンタライジング能力には「享受」や「受容」が正の影響を及ぼし、他者に対するメンタライジングの正確さには「統制」が正の影響を及ぼすと考えられる。

方 法

参加者

大学生、大学院生 204 名 (男性 66 名, 女性 136 名, その他 2 名) が調査に参加した。平均年齢は 21.3 歳 ($SD=1.50$) であった。

調査実施時期

2021年11月下旬～12月上旬

倫理的配慮

募集の際に、研究の目的や内容及び、質問紙への参加は強制ではなく自由意志によること、途中で回答をやめる自由があること、調査への不参加による教育・学習上の不利益は生じないこと、個人情報保護の徹底がなされていることを伝えた。また、本研究の実施にあたり、広島大学人間社会科学研究科倫理審査委員会の承諾を得た。

使用尺度

曖昧さへの態度尺度 (西村, 2007) 曖昧さに接した時の評価や指向性を測る尺度であり、曖昧さへの態度を測定する。質問項目は26項目で、「享受」、「受容」、「不安」、「統制」、「排除」の5因子からなる。「享受」は、曖昧さを魅力的なものと評価し、関与していくことに楽しみを見出す傾向を表す。「受容」は、曖昧さをそのまま認めて受け入れられる、曖昧さへの親和性や寛容さを表す。「不安」は、曖昧さに対する不安などの情緒的混乱と、それに伴う対処の難しさを感じる傾向を表す。「統制」は、曖昧さを否定的に評価し、知的に把握・対処(統制)しようとする傾向を表す。これは、情緒的な否定的態度である「不安」に対し、認知的な否定的態度と考えられる。「排除」は、曖昧さを認めず、排除して白黒つけたい傾向を表す。また、「享受」、「受容」は曖昧さへの肯定的態度を、「不安」、「統制」、「排除」は曖昧さへの否定的態度を表す。回答は「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」の6件法で行った。

日本語版メンタライゼーション尺度 (松葉他, 2022) メンタライジング能力を測る尺度である。質問項目は23項目で、「メンタライゼーションへの関心」、「他者に対するメンタライジング」、「自己に対するメンタライジング」の3因子からなる。本研究では、「メンタライゼーションへの関心」をメンタライジング的姿勢の指標として用い、「他者に対するメンタライジング」を他者に対するメンタライジング能力の指標として用いた。回答は「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で行った。

アジア版 RMET (野村他, 2006) Baron-Cohen 他 (Baron-Cohen et al., 1997; Baron-Cohen et al., 2001) が開発した RMET をもとに、野村他 (2006) がアジア人の顔で作成したテストである。人物の目とその周辺を表した画像を表示した上で、4つの感情語を提示し、画像の人物の感情に最もあてはまる感情語を1つ選択させた。課題は36題で構成される。本研究では、他者に対するメンタライジングの正確さの指標として用いた。

手続き

Sona Systems と呼ばれるクラウド型のオンライン参加募集・管理システムを用いて募集を行った。加えて、スノーボール法でも募集を行った。参加者にはオンライン調査ツールである Google forms で作成した調査の URL を伝え、PC やスマートフォンなど参加者自身のモバイル機器を用いて、調

査に参加させた。参加者には調査として、曖昧さへの態度尺度 (西村, 2007), 日本語版メンタライゼーション尺度 (松葉他, 2022), アジア版 RMET (野村他, 2006), 性別や年齢を尋ねるフェイスシートに回答させた。

結 果

使用尺度の平均値, 標準偏差, α 係数及び相関係数

まず使用尺度の平均値, 標準偏差, α 係数を算出した (Table 1)。 α 係数がすべて.70以上であったため, 各尺度の信頼性は許容できることが示された。

次に使用尺度間の相関係数を算出した (Table 2)。日本語版メンタライゼーション尺度, 「メンタライゼーションへの関心」, 「他者に対するメンタライジング」, アジア版RMETのすべてにおいて, 曖昧さへの態度の下位因子のいずれかと相関関係があることが示された。

曖昧さへの態度がメンタライジングに及ぼす影響

曖昧さへの態度がメンタライジングに及ぼす影響を検討するため, 曖昧さへの態度の下位因子5つを説明変数とし, 日本語版メンタライゼーション尺度, メンタライゼーションへの関心, 他者に対するメンタライジング, アジア版RMETをそれぞれ目的変数とした重回帰分析を行った。結果, 日本語版メンタライゼーション尺度は「統制」から有意な正の影響を受けていることが示された ($\beta = .325, p < .01$) ($R^2 = .181, p < .01$)。また, メンタライゼーションへの関心は「享受」 ($\beta = .174, p < .05$) と「統制」 ($\beta = .229, p < .05$) から有意な正の影響を受けていることが示された ($R^2 = .102, p < .0$)。

Table 1

使用尺度の平均値, 標準偏差及び α 係数

尺度名	平均値	標準偏差	α 係数
享受	4.56	0.68	0.78
不安	4.37	0.84	0.78
受容	4.05	0.83	0.76
統制	4.71	0.66	0.72
排除	3.87	0.97	0.78
日本語版メンタライゼーション尺度	3.55	0.41	0.72
メンタライゼーションへの関心	4.1	0.49	0.71
他者に対するメンタライジング	3.41	0.66	0.71
アジア版RMET	25.4	0.29	-

Table 2

使用尺度間の相関係数

尺度名	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1享受	-								
2不安	-.242 ^{**}	-							
3受容	.310 ^{**}	-.146 [*]	-						
4統制	.361 ^{**}	.271 ^{**}	-.172 [*]	-					
5排除	.148 [*]	.240 ^{**}	-.396 ^{**}	.516 ^{**}	-				
6日本語版メンタライゼーション尺度	.176 [*]	-.291 ^{**}	-.069	.199 ^{**}	.022	-			
7メンタライゼーションへの関心	.199 ^{**}	.118	.016 ⁺	.266 ^{**}	.061	.578 ^{**}	-		
8他者に対するメンタライジング	.162 [*]	-.075	.002	.228 ^{**}	.131 ⁺	.622 ^{**}	.247 ^{**}	-	
9アジア版RMET	-.199 ^{**}	.034	-.023	-.121 ⁺	-.187 ^{**}	.120 ⁺	.622 ^{**}	-.060	-

^{**} $p<.01$, ^{*} $p<.05$, ⁺ $p<.10$

1)。さらに、他者に対するメンタライジングは「統制」から有意な正の影響を受けていることが示された ($\beta=.236$, $p<.01$) ($R^2=.075$, $p<.01$)。加えて、アジア版RMETは「排除」から有意な負の影響を受けていることが示された ($\beta=-.201$, $p<.05$) ($R^2=.068$, $p<.01$)。

曖昧さへの態度の下位因子間の交互作用に関する検討

また、探索的に曖昧さへの態度の下位因子間の交互作用の検討を行った。まず、メンタライゼーション尺度を目的変数とした場合では、「享受」と「不安」、「受容」と「排除」、「不安」と「統制」、「統制」と「排除」に交互作用がみられた ($R^2=.319$, $p<.01$)。単純主効果の検定の結果、「不安」が低い場合に「享受」から有意な正の影響を受け ($b=.226$, $p<.01$)、「排除」が高い場合に「受容」から有意な負の影響を受け ($b=-.147$, $p<.01$)、「統制」が低い場合に「不安」から有意な負の影響を受け ($b=-.237$, $p<.01$)、「排除」が低い場合に「統制」から有意な正の影響を受けている ($b=.283$, $p<.01$) ことが示された。

次に、メンタライゼーションへの関心を目的変数とした場合では、「享受」と「不安」に交互作用がみられた ($R^2=.246$, $p<.01$)。単純主効果の検定の結果、「不安」が低い場合に「享受」から有意な正の影響を受けていることが示された ($b=.484$, $p<.01$)。

さらに、他者に対するメンタライジングを目的変数とした場合では、「享受」と「排除」、「受容」と「排除」、「不安」と「統制」、「不安」と「排除」、「統制」と「排除」に交互作用がみられた ($R^2=.276$, $p<.01$)。単純主効果の検定の結果、「排除」が高い場合に「享受」から有意な正の影響を受け ($b=.327$, $p<.01$)、「排除」が低い場合に「受容」から有意な正の影響を受け ($b=.269$, $p<.05$)、「統制」が低い場合に「不安」から有意な負の影響を受けている ($b=-.218$, $p<.01$) ことが示された。また「排

除」が低い場合に「不安」から有意な負の影響を受け ($b=-.201, p<.05$), 「排除」が低い場合に「統制」から有意な正の影響を受けている ($b=.515, p<.01$) ことも示された。

加えて、アジア版RMETを目的変数とした場合では、交互作用はみられなかった ($R^2=.130, ns$)。

考 察

曖昧さへの態度の下位因子間の相関関係

曖昧さへの態度の下位因子間の相関係数より、曖昧さへの肯定的態度間や否定的態度間では正の相関がみられ、曖昧さへの肯定的態度と否定的態度では負の相関がみられた。また、「享受」と「統制」には弱い正の相関がみられた。この尺度を開発した西村 (2007) でもみられた関係性であり、この2つの態度は曖昧さを魅力的なものとして評価するか否定的に評価するかの違いは存在するが、どちらも曖昧なものに関与していこうとする傾向があるため、この2つの態度に正の相関がみられると示されている。以上のことから、先行研究に支持される妥当な相関関係がみられたと考えられる。

曖昧さへの態度がメンタライジングに及ぼす影響

本研究の1つ目の仮説は、曖昧さへの肯定的態度である「享受」や「受容」がメンタライジング的姿勢に正の影響を及ぼすというものであった。結果、「享受」と「統制」から正の影響を受けていたため、「享受」に関する仮説は支持された。一方「統制」は曖昧さへの否定的態度の一つであるため、仮説とは異なる結果も得られた。Allen et al. (2008 上地他訳 2015) は曖昧さ耐性の高さがメンタライジング的姿勢に必要なことを示したが、曖昧さをなくしたいために知的に対処していく「統制」もメンタライジング的姿勢に正の影響を与えていたことから、曖昧さ耐性の高さが必要であるとはいえない可能性が示唆された。さらに西村 (2007) より、「享受」と「統制」には曖昧なものに関与していこうとする傾向が共通していると示されているため、メンタライジング的姿勢には曖昧さ耐性の高さではなく、曖昧さに対して積極的に関与していく態度が必要になると考えられる。

仮説の2つ目は、曖昧さに対して開かれた態度を持つことは他者の心理状態を考え、共感的配慮を行う傾向がある (西村, 2013) ことから、曖昧さへの肯定的態度である「享受」や「受容」がメンタライジング能力に正の影響を及ぼすというものであった。しかし、否定的態度である「統制」から正の影響を受けていたため、仮説は支持されなかった。「統制」は曖昧さに対して知的に対処しようとする態度であることから、曖昧な自他の精神状態に対しても知的に対処するものであると考えられる。そのため、曖昧さに対して知的に把握、対処しようとする態度がメンタライジング能力には必要になる可能性があることが示唆された。

仮説の3つ目は、曖昧さに対して否定的態度で知的に把握、対処しようとする傾向である「統制」が他者に対するメンタライジングの正確さに正の影響を及ぼすというものであった。しかし「排除」から負の影響を受けていたため、仮説は支持されなかった。中嶋・奥野 (2020) は、「統制」では曖昧な状況に対して新聞や本、他者などから情報を得ることを行わず、自分自身の考えだけで再検討

する傾向があると示している。また Allen et al. (2008 上地他訳 2015) は、正確に精神状態を解釈するためには、他者の考えや解釈を聞いてみる必要があると示している。自分自身の考えだけで曖昧さを対処しようとする「統制」の態度だけでは、正確さを高めることにはつながらないため、「統制」からは他者に対するメンタライジングの正確さへの影響がみられなかったと考えられる。

一方、「排除」は、曖昧なことに关して考えることを全く行わないだけでなく、十分向き合わずに対処してしまうリスクがあることが示されている (中嶋・奥野, 2020)。つまり「排除」は、曖昧さに対して向き合わずに曖昧さをなくそうとしたり無視したりする傾向があるため、本研究でも他者の表情という曖昧な刺激に対して十分向き合わずに判断した結果、他者に対するメンタライジングの正確さを下げることになった可能性があると考えられる。

仮説の4つ目は、他者に対するメンタライジング能力と他者に対するメンタライジングの正確さとは正の相関がみられるが、それぞれに影響を及ぼす曖昧さへの態度は異なるというものであった。しかし、これらの間に相関はみられず仮説は支持されなかった。一方、他者に対するメンタライジング能力は「統制」から正の影響を受けていたのに対し、他者に対するメンタライジングの正確さは「排除」から負の影響を受けていたため、それぞれに影響を及ぼす曖昧さへの態度は異なるという仮説は支持された。相関は見られず、また影響を受ける曖昧さへの態度も異なっていたため、メンタライジングの正確さはメンタライジング能力に含まれてはいるが、正確さが高くてもメンタライジング能力も高いとはいえず、またメンタライジング能力が高くても正確さがあるとはいえない可能性が示唆された。

ただし、日本語版メンタライゼーション尺度は自己評価で行う質問紙であり、対してアジア版 RMET は自己評価ではなく正答のあるテストで測定するという違いがあった。そのため、自己評価で測定したメンタライジング能力と、自己評価によらないメンタライジングの正確さという測定方法の違いによって相関がみられなかった可能性も考えられるため、今後検討する必要がある。

曖昧さへの態度の下位因子間の交互作用に関する検討

曖昧さへの態度の下位因子間の交互作用を探索的に検討した結果、メンタライジング的姿勢は、「不安」が低い場合に「享受」から正の影響を受けていることが示された。よって、曖昧さに対して情緒的な混乱が生じ対処不能になることが少ない傾向を持つ人は、曖昧さに対して関与することにより楽しみを見出す傾向が高まるため、メンタライジング的姿勢が高いという結果につながったと考えられる。

また、「排除」や「不安」が低い場合に「統制」や「受容」、「享受」がメンタライジング能力に正の影響を及ぼしているため、曖昧さへの否定的態度の中でも、曖昧さを認めないような態度や曖昧さへの否定的な感情が少ない人の方がメンタライジング能力は高いと考えられる。

しかし、他者に対するメンタライジング能力だけは「排除」が高い場合に「享受」から正の影響を受けていることが示された。曖昧さ耐性が高い、もしくは高すぎると、曖昧さを減少させようという動機や行動が欠如している場合があるため (吉川, 1980), 曖昧さに対して関与していくことに楽しみを見出す傾向だけではなく、同時に曖昧さを排除しようとする傾向も持つ人は、他者の精神

状態を推測しようとする能力がより高い可能性があると考えられる。

本研究の成果

本研究では、曖昧さへの態度がメンタライジングに及ぼす影響を検討することを目的とした。メンタライジング的姿勢には曖昧さ耐性の高さが必要である (Allen et al., 2008 上地他訳 2015) ことが示唆されているため、仮説ではメンタライジングには曖昧さを好む肯定的態度が必要になると考えた。しかし、「曖昧さを好ましく思い、面白いものとして評価する」という態度ではなく、「曖昧さに対して積極的に関与する」という態度がメンタライジング的姿勢に影響を及ぼしていることが示唆された。

またメンタライジング能力には、特に曖昧な状況を知的に対処・処理しようという態度が影響を及ぼしていることが示された。このことから、メンタライジング的姿勢も含むメンタライジング能力を高めるためには、曖昧な状況、つまり自他の精神状態について、好ましく肯定的なものかどうかが関係なく、積極的な関与が必要になると考えられる。

一方、曖昧な状況を無視したり、十分向き合わずに対処する態度はメンタライジングの正確さを下げることが示された。そのためメンタライジングの正確さを高めるためには、曖昧さに対して本や他者など様々な情報を用いて十分に吟味することが必要になると考えられる。

今後の展望

本研究では、他者に対するメンタライジング能力と他者に対するメンタライジングの正確さについて相関がみられなかったが、測定方法の違いによる可能性が考えられるため、他の尺度や測定方法でも検討を行う必要がある。

加えて、日本では現時点でメンタライジング能力を測定する質問紙は存在するが、メンタライジングの正確さを測定する方法については検討されていない。本研究では他者に対するメンタライジングの正確さを測定するためアジア版 RMET を用いたが、目の周辺という限定的な情報のみで感情の推測を行うテストであることが限界点として挙げられる。そのため、目の周辺ではなく、ある対人場面の動画や文章などといった他の情報から他者感情を推測した場合の正確さを検討するためメンタライジングの正確さに焦点を当てたより良い尺度を用いる必要がある。

また本研究では、参加者が知的な対処を多く用いると考えられる大学生・大学院生であったことから、曖昧さに対して知的な対処を行う「統制」の態度を持つ参加者が多くなり、結果に影響を与えた可能性がある。そのため、大学生・大学院生だけではなく他の年齢層でも検討を行う必要もある。

引用文献

Allen, J.G., Fonagy, P., & Bateman, A.W. (2008). *Mentalizing in clinical practice*. Washington, DC: American Psychiatric Publishing.

- (アレン J. G.・フォナギー P.・ベイトマン A. W. 狩野 力八郎 (監修) 上地 雄一郎・林 創・大澤 多美子・鈴木 康之 (訳) (2014). *メンタライジングの理論と臨床——精神分析・愛着理論・発達精神病理学の統合——* 北大路書房)
- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., & Jolliffe, T. (1997). Is there a “language of the eyes”? Evidence from normal adults, and adults with autism or Asperger syndrome. *Visual Cognition*, 4, 311-331.
- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Hill, J., Raste, Y., & Plumb, I. (2001). The Reading the Mind in the Eyes test revised version: A study with normal adults, and adults with Asperger syndrome or high functioning autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 42, 241-251.
- Budner, S. (1962). Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, 30, 29-50.
- Fonagy, P., & Target, M. (1997). Attachment and reflective function: Their role in self-organization. *Development and Psychopathology*, 9 (4), 679-700.
- 今川 民雄 (1981). Ambiguity Tolerance Scale の構成 (1) ——項目分析と信頼性について—— 北海道教育大学紀要第一部 C 教育科学編, 32, 79-93.
- 今里 有紀子・東條 光彦・上地 雄一郎 (2017). 養育内省機能質問票 (PRFI) の作成ならびに信頼性・妥当性の検討 兵庫教育大学教育実践学論集, 18, 37-48.
- 上地 雄一郎 (2015). *メンタライジング・アプローチ入門——愛着理論を生かす心理療法——* 北大路書房
- 厚生労働省 (2020). 能力開発基本調査 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/104-02b.pdf>
- 松葉 由香理・リー スティーブケイ・原口 幸・板野 蛍・岩崎 美奈子・井原 成男・桂川 泰典 (2022). 日本語版メンタライゼーション尺度 (The Japanese Mentalization Scale: J-MentS) 作成の試み 発達心理学研究, 33 (3), 137-145.
- 中嶋 史織・奥野 雅子 (2020). 曖昧さに対する態度が適応感と対処行動に与える影響 現代行動科学学会誌, 36, 33-42.
- 西村 佐彩子 (2007). 曖昧さへの多次元構造の検討——曖昧性耐性との比較を通して—— パーソナリティ研究, 15 (2), 183-194.
- 西村 佐彩子 (2013). 曖昧さへの態度と多次元共感性の関連 日本心理学会第 77 回大会論文集
- 野村 光江・吉川 左紀子・Reginald B. Adams・Nalini Ambady・佐藤 弥 (2006). 他者の心の読み取りにおける文化の影響 日本心理学会第 70 回大会発表論文集
- 坂田 浩之 (2021). 大学生における醜形恐怖心性とメンタライジングの関連 パーソナリティ研究, 30 (2), 101-110.
- 千住 淳・東條 吉邦・紺野 道子・大六 一志・長谷川 寿一 (2002). 自閉症児におけるまなざしからの心の読み取り——心の理論と言語能力・一般知能・障害程度との関連—— 心理学研究, 73 (1), 64-70.
- 友野 隆成・橋本 幸 (2005). 改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み パーソナリティ研究, 13 (2), 220-230.
- 吉川 茂 (1980). Ambiguity Tolerance の程度と適応性 関西学院大学教育学科研究年報, 6, 35-40.